Human Rights

平成29年度

全国中学生
人権作文コンテスト

横浜市大会
作文集

横浜市人権啓発活動ネットワーク協議会
横浜市・横浜人権擁護委員協議会・横浜市人権擁護委員会・横浜地方法務局

横浜市教育委員会

平成29年度

全国中学生人権作文コンテスト
横浜市大会作文集

■はしがき

昭和二十三年（一九四八年）十二月十日に国際連合総会で世界人権宣言が採択されたことを記念して、毎年十二月四日から十日まで人権週間が設けられています。

これにあわせて、人権尊重思想の普及高揚を図るための啓発活動の一環として、横浜市人権啓発活動ネットワーク協議会と横浜市教育委員会の共催で「全国中学生人権作文コンテスト横浜市大会」を実施しています。

本コンテストは次代を担う中学生に、人権問題についての作文を書いてもらうことにより、人権尊重の重要性についての理解を深めるとともに、豊かな人権感覚を身につけてもらうことを目的としています。

本年度は、一三九校、五九、一九三編に及ぶ多数の作品が寄せられました。

コンテストに寄せられた応募作品はいずれも中学生らしい感性に富み、人権問題について、自ら真剣に考えて意見を述べたものばかりで、応募された皆様の真摯な姿勢には心を打たれるものがあります。

この作文集は、校内審査を経た七七四編から、一次審査で七二編、二次審査で五十編を選考し、さらに最終審査で最優秀賞、優秀賞に選ばれた二三編を収録したものです。より多くの方々にお読みいただき、身近な生活の中で人権尊重の輪が広がることを願ってやみません。

終わりに、コンテストの実施にあたり多大な御尽力をいただきました、審査に関わられた先生及び多くの関係者の皆様方に対し、心から感謝申し上げます。

平成二十九年（二〇一七年）十一月

横浜市人権啓発活動ネットワーク協議会
（横浜市・横浜人権擁護委員協議会・横浜市人権擁護委員会・横浜地方法務局）
横浜市教育委員会

【審査講評】

第三十七回全国中学生人権作文コンテスト横浜市大会に、市内一三九校から五九、一九三編の作品を御応募いただき、ありがとうございました。また、参加された各校の先生方におかれましては、熱心に御指導いただき、また審査にあたられましたことに厚く御礼申し上げます。

日ごろの自らの体験を通じて感じたこと、考えたことを人権の視点から見つめ直し、一つの作品としてまとめ上げた中学生の皆さんの意欲と努力に心から敬意を表します。

応募作品のテーマは、いじめなど子どもに関するもののほか、戦争と平和、障害者、環境問題など幅広い分野から寄せられました。また、時代を反映してプライバシー問題をテーマとした作品や外国での生活体験を元にした作品も多く寄せられました。

作品の多くは、家族や友人、地域の人との日常のふれあいを通じてのふとした気づきや心の動きを素直に表現しており、その感覚にはっとさせられる作品もありました。

中学生の皆さんが人権作文を書くことで培った「人権の視点」を、これからも永く持ち続けてくださ

ることを願っております。

横浜市大会においては、校内審査を経た作品について、市立中学校教育研究会国語科部会の先生方による一次審査、教育委員会事務局指導主事による二次審査を行い、最終審査で最優秀賞など各賞を決定いたしました。最優秀賞のうち、「知る、そして伝え、行動する」「こころの壁」「いじめについて」「障害を心の輪に」「ありのままの自分で」「当たり前を当たり前に」「『思いやり』を未来へつなぐ」「灯」を神奈川県大会の優秀賞として推薦いたしましたことを御報告申し上げます。

審査員の皆様には、御多忙の中、審査に御協力いただきましたことに改めて御礼申し上げます。

最後に、この作文集が、中学生のみならず、広く市民の皆様が人権について考えるきっかけとなれば幸いです。

審査委員長　坂　田　清　一

（横浜人権擁護委員協議会会長）

目次

はしがき
審査講評
入選者紹介……1

最優秀賞

●横浜市長賞
知る、そして伝え、行動する　横浜共立学園中学校……二年　浮穴（うけな）　絢香（あやか）……7

●横浜市教育長賞
こころの壁　横浜市立神奈川中学校……三年　並木康太郎（なみきこうたろう）……10
いじめについて　横浜市立六ツ川中学校……二年　江藤（えとう）　温大（はると）……13

●横浜人権擁護委員協議会長賞
障害を心の輪に　横浜市立青葉台中学校……一年　佐々木愛子（ささきあいこ）……15
ありのままの自分で　横浜市立あかね台中学校……三年　春永（はるなが）　真穂（まお）……18

●横浜市人権擁護委員会長賞
当たり前を当たり前に　横浜市立篠原中学校……三年　天野葉月……20
「思いやり」を未来へつなぐ灯　横浜市立保土ケ谷中学校……三年　柳澤知里……22
横浜市立東鴨居中学校……三年　小池優花……25

●横浜DeNAベイスターズ賞
国が違うだけで　横浜市立栗田谷中学校……一年　尹愛里……28

●横浜F・マリノス賞
世界のことをもっと知りたい　横浜市立東山田中学校……一年　松岡悠……30

●横浜FC賞
小さな人権　横浜市立並木中学校……二年　香川ねむ……32

●横浜ビー・コルセアーズ賞
支え合うこと　横浜市立山内中学校……三年　川田凜……35

優秀賞

ヘアドネーション　横浜市立森中学校……二年　榎本詩絵瑠……37
祖母の笑顔のために　横浜市立岡津中学校……三年　大石元……39
外国人への意識の変化　横浜市立新田中学校……二年　加藤かりん……41
私の小さなものさし　横浜市立早渕中学校……二年　神谷綾音……44
祖父が教えてくれたこと　横浜市立南高等学校附属中学校……三年　菊地龍斗……47
二〇二〇年に向けて　横浜市立みたけ台中学校……二年　笹井夢……50
残った傷跡　横浜市立神奈川中学校……三年　嶋澤緋里……52
座れる権利　横浜市立南高等学校附属中学校……二年　関根史華……55
清らかな水　横浜市立都田中学校……三年　沼田欧介……58
みんながもっている人権　横浜市立南希望が丘中学校……二年　箱崎佑音……61
壁を破壊させてください　横浜市立山内中学校……三年　三隅遥……64

参加校紹介……68

応募状況……70

入選者紹介（敬称略）

最優秀賞（横浜市長賞）

浮穴（うけな）　絢香（あやか）　知る、そして伝え、行動する　……横浜共立学園中学校　二年

最優秀賞（横浜市教育長賞）

並木康太郎（なみきこうたろう）　こころの壁　……横浜市立神奈川中学校　三年

江藤（えとう）　温大（はると）　いじめについて　……横浜市立六ツ川中学校　二年

最優秀賞（横浜人権擁護委員協議会長賞）

佐々木愛子（ささきあいこ）　障害を心の輪に　……横浜市立青葉台中学校　一年

春永（はるなが）　真穂（まお）　ありのままの自分で　……横浜市立あかね台中学校　三年

最優秀賞（横浜市人権擁護委員会長賞）

天野（あまの） 葉月（はづき） 当たり前を当たり前に ……横浜市立篠原中学校 三年

柳澤（やなぎさわ） 知里（ちさと） 「思いやり」を未来へつなぐ ……横浜市立保土ケ谷中学校 三年

小池（こいけ） 優花（ゆうか） 灯 ……横浜市立東鴨居中学校 三年

最優秀賞（横浜ＤｅＮＡベイスターズ賞）

尹（いん） 愛里（あいり） 国が違うだけで ……横浜市立栗田谷中学校 一年

最優秀賞（横浜Ｆ・マリノス賞）

松岡（まつおか） 悠（ゆう） 世界のことをもっと知りたい ……横浜市立東山田中学校 一年

最優秀賞（横浜ＦＣ賞）

香川（かがわ） ねむ 小さな人権 ……横浜市立並木中学校 二年

最優秀賞（横浜ビー・コルセアーズ賞）

川田（かわた）　凛（りん）　支え合うこと　……横浜市立山内中学校　三年

優秀賞（氏名五十音順）

榎本詩絵瑠（えのもとしえる）　ヘアドネーション　……横浜市立森中学校　二年

大石（おおいし）　元（はじめ）　祖母の笑顔のために　……横浜市立岡津中学校　三年

加藤（かとう）かりん　外国人への意識の変化　……横浜市立新田中学校　二年

神谷（かべや）　綾音（あやね）　私の小さなものさし　……横浜市立早渕中学校　二年

菊地（きくち）　龍斗（りゅうと）　祖父が教えてくれたこと　……横浜市立南高等学校附属中学校　三年

笹井（ささい）　夢（ゆめ）　二〇二〇年に向けて　……横浜市立みたけ台中学校　二年

嶋澤（しまざわ）　緋里（あかり）　残った傷跡　……横浜市立神奈川中学校　三年

関根（せきね）　史華（ふみか）　座れる権利　……横浜市立南高等学校附属中学校　二年

沼田（ぬまた） 欧介（おうすけ） 清らかな水 …… 横浜市立都田中学校 三年

箱崎（はこざき） 佑音（ゆうと） みんながもっている人権 …… 横浜市立南希望が丘中学校 二年

三隅（みすみ） 遥（はるか） 壁を破壊させてください …… 横浜市立山内中学校 三年

入賞（氏名五十音順）

浅見絵理奈（あさみえりな） アメリカで感じたこと …… 横浜市立日限山中学校 三年

石塚（いしづか） 彩奈（あやな） 誰よりも頑張り屋 …… 横浜市立早渕中学校 二年

奥本（おくもと） 莉里（りり） 私の小さな願い …… 横浜市立中和田中学校 三年

小原（おばら） 安珠美（あすみ） 意思と保身 …… 横浜市立鶴ケ峯中学校 三年

金丸（かねまる） 侑理（ゆり） 在日たちの「人権」を考える …… 横浜市立日限山中学校 三年

川上（かわかみ） 莉那（りな） 許すけど許せない、許さない …… 横浜市立富岡中学校 三年

橘田（きった） 若奈（わかな） これからの未来のために …… 横浜市立南中学校 一年

古賀（こが）　朱莉（あかり）　認め合いで成り立つ人権　……横浜市立中山中学校　二年
佐藤光一郎（さとうこういちろう）　尊重し学び合う社会を　……横浜市立みたけ台中学校　三年
佐藤（さとう）さくら　剣　……横浜市立中山中学校　一年
佐野（さの）　愛理（えり）　無知の過ち、知るが変える世界　……横浜市立六浦中学校　三年
辛（しん）　奈（ね）　映（よん）　出会った幸せ　そして、大切な愛しい人　…横浜市立横浜吉田中学校　二年
髙篠（たかしの）　芽李（めい）　辛い日々から学んだ大切なこと　……横浜市立旭北中学校　二年
武本（たけもと）　歩（あゆむ）　ステレオタイプ　……横浜市立日吉台中学校　三年
戸上（とがみ）　幹太（かんた）　周りに負けない自分になる　……横浜市立早渕中学校　三年
友利（ともり）　陽香（はるか）　人との関わりをやめない　……横浜市立日吉台中学校　三年
蜷川（にながわ）　沙希（さき）　過去を知ることの大切さ　……横浜共立学園中学校　二年
二本柳姫乃（にほんやなぎひめの）　我が家の桃は関心への一歩　……横浜市立深谷中学校　二年
林田（はやしだ）　玲奈（れな）　ハッピーエンドは妄信　……横浜市立寺尾中学校　三年

平田ミアラターニャ　私の経験……横浜市立六浦中学校　三年
松下　昇馬　関心を寄せることは理解への第一歩…横浜市立いずみ野中学校　三年
松本　真夏　明るい未来を守るために……横浜市立中山中学校　一年
真鍋明日香　今が作る私達の未来……横浜市立日吉台中学校　三年
嶺井　千紗　障害者の自由のために……横浜市立鶴見中学校　二年
安冨　和佳　私たちが直面する危機……横浜市立万騎が原中学校　三年
和智あずさ　ひろちゃんから学んだこと……横浜市立神奈川中学校　二年

最優秀賞（横浜市長賞）

知る、そして伝え、行動する

横浜共立学園中学校　二年
浮穴絢香

私がハンセン病について考えるきっかけとなったのは、私が通う中学校で毎年設けられている「ハンセン病を正しく理解する週間」で、ハンセン病について学んだことだった。

それまで私は、ハンセン病について何も知らなかった。しかし、その時に私は、ハンセン病はらい菌に感染することで起こる病気であり、らい菌は極めて感染力の弱い病原体で、新薬が開発されたことにより一般的疾病として完治するものとなっていることを初めて知った。それと同時に、私は疑問がわいてきた。ハンセン病はそのような感染力の弱い病気であるのに、なぜ今なおハンセン病に対する差別が根強く残っているのだろうか。

ハンセン病についてもっと知らなければならないと思った私は、学校が一年に二回、毎年行っている「多磨全生園訪問」に参加することにした。

森に囲まれたそこには庭園や教会、神社、小さなお店や図書館などが整備されていて、一つの静かな町となっていた。そんな穏やかな空気が一変して重く感じられたのは、国立ハンセン病資料館に足を踏み入れた時だった。そこでは、一つ一つの資料が当時の残酷な状況を物語っていた。特に印象に残っているのは、患者が子孫

を残さないようにさせられたということだ。療養所では、患者を大人しく療養所に居させるために結婚は許したが、その一方で子どもを産めないようにさせたのだ。すべての人に結婚も出産も当然認められている現在では、全く想像もできないことだが、当時は実際に行われていたことを知り、強い衝撃を受けた。

療養所に強制隔離され一生療養所から外に出られない、親や兄弟と一緒に暮らすこともできない、実名で名乗ることすらできない、結婚しても子供を産むことも許されない、亡くなっても故郷の墓に埋葬してもらえない……。そんな想像を絶することが行われ、患者の方々が耐え難い苦しみを受けてきたということが、初めて現実として胸に迫ってきた。

当時、患者の強制隔離に反対した医師もいたそうだ。しかし、その適切な考えは受け入れられなかった。誤った知識や考えに多くの人が流され、従い、少数の正しい考えが握り潰されたのだ。

「無知」と「心の弱さ」――様々な差別の原因は、そこにあるのではないだろうか。「無知」と「心の弱さ」は誰でも持っている。私の中にも、ある。だからこそ、学ぶこと、知ることが大切だと思う。今回私は、学校で正しい知識を学ぶことができたが、もし知らないままだったら、無意識のうちに差別してしまったかもしれない。それは恐ろしいことだ。正しく「知る」ことは、差別のない社会への第一歩になるに違いない。

人は誰しも、いつどんな病気になるか分からない。そして、病気は誰のせいでもない。病気だという理由で、人が誰でも永久に持っている人権を侵すことは絶対にあってはならないと改めて考えさせられた。

多磨全生園を訪れ、園内に残る強制隔離の爪あとを目の当たりにして、その全てではないにしても私はハンセン病について現実を「知る」ことができた。ハンセン病元患者の高齢化が進む現在、私たち若い世代は目を背けずにもっとハンセン病について正しく知る必要があると思う。「知」は責任を生む。自分たちにできるこ

とを実践することが求められる。根強く残るハンセン病の差別、そしてあらゆる差別をなくすために、語り継がれる側から、行動して、語り継ぐ側へとなっていかなければならない。そして、人を尊重し思いやる心を持っているだろうかと、常に自分に問いかけていきたい。

多磨全生園の庭園の空は、すがすがしく澄んでいた。元患者の方々の心も澄む日が来るようにと祈りながら、来年もここを訪れようと心に決めた。

最優秀賞（横浜市教育長賞）

こころの壁

横浜市立神奈川中学校　三年
並木（なみき）　康太郎（こうたろう）

「これ面白かったよ。」

兄に借りた一冊の本。『みんなが手話で話した島』というその本を読んでみたら、以前骨折して、右手が使えなかったとき、いろいろなものが右手用に出来ていて、不自由に感じたことを思い出した。

世の中は多数派に合わせてできている、しかしその本の中の島は違った。少数派の人も不自由を感じずに暮らせる島だった。

本によると、その島は、マーサズ・ヴィンヤード島と言い、アメリカのマサチューセッツ州の大西洋岸の沖合にある。農業・漁業を主産業とする、ごく普通の島だが、他の島では見られない特徴があった。

この島の特徴は、かつて三百年以上に渡り遺伝によって、先天的に耳の聴こえない人の割合が非常に高かった。そして、遺伝の発生に対して、人々がそれに適応した社会を築いていたことが、最大の特徴だ。

この島では、全員が手話を覚え、実生活の場で使っていたそうだ。子供たちは英語と手話という二つの言葉を両方使いながら、大人になっていった。この島の人々は誰とでも手話で話し、耳の聴こえる人と聴こえない人、両者の生活に、ほとんど差はなかったらしい。

私がこの本を読んで、特に印象に残ったのは、この島の女性の次のような言葉だ。「あの人たちにハンディキャップなんてなかったですよ。ただ耳が聴こえないというだけでした。」

「そうか、周りの人が手話をすることができて、周りの人と変わらず生活することができれば、『耳が聴こえない』ということは、『ただ耳が聴こえないということだけ』になるんだ。」と気付いた。私は今まで、耳が聴こえないことは、ハンディキャップだと思っていた。

耳の聴こえない人が不便を感じているのは耳が聴こえないからではなく、周囲とのコミュニケーションが取れないからだ。この島のように周囲とのコミュニケーションが取れるようになれば、耳が聴こえないということはハンディキャップにはならない。

この本を読んで、障害とは体の不自由な人のことを言うのではなく、その人の周りにある偏見の目や、人間関係などの壁のことを言うのだということがわかった。

少し前に、駅のホームから、目の不自由な人が落ちて亡くなるという事故があったのを新聞で読んだ。その後、駅で困っている様子の目の不自由な人を見かけ、思い切って「大丈夫ですか。何かお役に立てることはありますか。」と声をかけてみた。すると「いや、大丈夫ですから。」と言って、行ってしまった。

声のかけ方が悪かったのかな、急に声をかけたのでびっくりさせてしまったのかな、どうやって声をかければよかったのかな、それとも本当に手助けが必要なかったのかな、などと、いろいろ考えてしまった。また、せっかく声をかけても拒否されたらどうしようと臆病になる人もいるかもしれない。

このようなことがあったので、中学校の道徳などの授業で、目の不自由な人などを先生として招いて、直接、みんなは話を聞き、学ぶ機会があると良いなと思った。

話しかけ方などを知り、上手くコミュニケーションをとれるようになることで、壁を感じている人を減らすことができるのではないだろうか。

そうすれば、「思い切って声をかける」のではなく、「声をかけることがあたり前」だと思えるようになると思う。

親戚の叔母が、ニューヨークに住んでいたとき、ベビーカーで階段を上り下りしたり、バスに乗り降りしたりする際には、必ず誰かが手伝ってくれたそうだ。日本に帰ってきたら、ベビーカーを抱えて階段を上り下りしている時に手伝ってくれる人がほとんどいなくて、とても苦労したと言っていた。叔母の話を聞いて、困っている人がいたら手伝うということはやはりあたり前にできたらいいと思う。

そして、みんなが進んで、困っている人に声をかけ、手伝うということが、特別なことではなく、普通のことになるといいなと思う。

良い習慣を広めるためには、一人でも多くの人が行動していく必要がある。少しずつでも困っている人を手伝うという習慣が広まるといいなと思う。

そのためにも、コミュニケーションの方法を学び、壁をなくすための技術を身に着けて、身近で困っている人を手伝えるようにしていこうと思う。

最優秀賞（横浜市教育長賞）

いじめについて

横浜市立六ツ川中学校　二年
江藤温大

最近、学生の自殺などのニュースをテレビなどでよく見かけるようになりました。そして、その原因のほとんどがいじめに苦しんだものが多いと感じました。

僕の家ではいじめのニュースが流れるたびに母に言われる言葉があります。

「いじめる側になるくらいなら、いじめられる側になりなさい。」

僕はいじめられるのは嫌だし、なぜ母が僕にそんな言葉を言うのか理解ができませんでした。そこで僕は思いきって母に、なぜそのようなことを言ったのかと聞いてみました。すると母は自分の辛い過去について、泣きながらも話してくれました。

母は中学生のときに、集団無視、暴力などのひどいいじめにあっていたそうです。最初はいじめていた人の好きな人が母のことを好きになったから。そんなささいなことからいじめは始まり、

「顔が派手だ。」や「男たらし。」

などと言われるようになり、一人だった加害者がどんどん増えて学校に行けなくなったそうです。

そのときのいじめによる暴力が原因で母の左耳は今も聞こえません。そして化粧をしません。顔に何かを塗

ることが好きではないと話していた母ですが、僕は昔言われた「顔が派手」という言葉を気にしているのかなと思いました。

いじめにあってから二十五年たった今も母は苦しんでいます。加害者にとってはそのときの一瞬のことでも、被害者にとっては負の感情がずっと残ってしまうのだと思います。いじめはどんな理由があっても絶対に許せないことです。

いじめを無くすために自分にできることを考えてみました。でも答えは簡単には見つかりません。そこで母にどう立ち直ったのかを聞いてみたら、

「たった一人だったけど味方になってくれた友達がいたから死ねなかった。」

と笑って答えてくれました。辛い過去を乗りこえた母はとても強いと思うし、その母を救ってくれた友達を心から尊敬しました。

僕も強くなりたいと思います。周りに流されず、間違っていることをきちんと話して、母のように強く、母の友達のように誰かの力になれる、そんな人になりたいです。そう思うことがいじめを無くす第一歩ではないかと思っています。

最優秀賞（横浜人権擁護委員協議会長賞）

障害を心の輪に

横浜市立青葉台中学校　一年
佐々木　愛子

二〇一六年の夏。リオデジャネイロオリンピックで、多くの選手が活躍した。

特に印象に残っているのは、パラリンピックだ。体に障害を持つ選手が、障害の種類によって細かく、百数十個ほどに「クラス分け」される。なので出場した選手の約四三パーセントがメダルをもらえるというのも特徴だ。競技を見ていると色々な選手がいる。両腕が無く、器用に足を使って矢を放つアーチェリーの選手。自閉症で己の不安と戦いながら、本番に挑む水泳の選手。そんな自分が持つ障害と向き合いながら、スポーツに命を懸ける姿は、とても格好良かった。

そのパラリンピックが、ある日、私の家で話題に上がった。父が、

「パラリンピックは、どのような態度で、見れば良いのか分からない。」

と、言った。確かにメディアなどでも、オリンピックとは違い、選手が残した成績、記録よりも障害や選手になるまでの経緯が、クローズアップされる。つまり「障害者のスポーツ」として見られているのだ。だから「頑張れ日本！」「負けるな！」と応援するのは何となく気が引けてしまう。しかし私が見たパラリンピックは、そのようなものではなかった。スポーツに懸ける意地、思い、情熱はオリンピックと同じ、もしくはそれ以上

だったかもしれない。それなのに、なぜ純粋にスポーツとして見てくれないのかと、とても悔しかった。だから、

「もし私がパラリンピックの選手だとしたら、障害者としてではなく、アスリートとして見てほしいと思う。」

と、答えた。けれど、そう言う反面、私は自分の言葉に、自信が持てなかった。理屈では分かっていても、やはりテレビ画面に映る姿は、義足をつけている、目が見えない、車椅子の、まぎれもない「障害者」だった。

そんなある日、パラリンピックについて、特集している番組があったので見ていた。その中で私の考え方を変えたシーンがある。

男子の背泳ぎだった。一人、両腕が無い選手がいた。周りの選手よりも小さく見えた。その選手はスタートの時に、スタッフが差し出すタオルを、歯で食いしばりフォームを作っていた。ホイッスルが鳴った瞬間、頭をのけぞり、体をしならせ、きれいに着水した。そして、イルカの様なキックの力だけで、どんどん他の選手を引き離し、圧巻の優勝だった。観客の歓声は、永遠に終わらないのではと、思ったほどだ。

その直後のインタビュー映像があった。

「大きなハンデを負っているのに、一位とはすごいですね。」

という記者の言葉に対して、

「私は両腕が無いという障害を持っています。けれど、世界中の誰もが必ず障害を持って生まれてきていると思っています。人前で話す事が苦手だったり、スポーツが不得意だったり人によって色々な「障害」があります。だから私は、その障害ときちんと向きあって、自分の美点にすることが大切だと思います。」

この言葉を聞いた時、私の中での障害のイメージが変わった。今までは障害と聞くと、「可哀想」、「不自由」、

「他の人とは違う」というマイナスな事を連想しがちだった。けれど、「みんなが必ず障害を持っている。」という話を聞いた時、そう思っていた自分が恥ずかしくなった。この世界に何でも完璧にできて、一つも欠陥の無い人間なんて存在しない。もし、そんな人ばかりだったら、もう人とのつながりなんて必要なくなってしまう。勉強が苦手だったら教えてもらえばいい。そして代わりに車椅子を押して支えてあげる。

そのように、一人一人の苦手な所や、不自由な所に、温かく手を差しのべれば、それは人と人とを結ぶ「心の輪」になると思う。

私は今まで、自分の感情を思い切り表現するのが苦手だった。けれど、色々な人との出会いや素敵な思い出のお陰で、今では自分の喜怒哀楽が伝えられる。だから、その分、困っている人、悩んでいる人がいたら、精一杯支えてあげたいと思う。

最優秀賞（横浜人権擁護委員協議会長賞）

ありのままの自分で

横浜市立あかね台中学校　三年
春永真穂

これは、私が小学校低学年だった頃の話です。

同じクラスだったA君は、いつもニコニコしていて、皆を和ませるムードメーカーの存在でした。誰かが泣いていたり、落ち込んでいると、真っ先にその人に寄り添って声をかけるのもA君でした。私は彼のことを、誰よりも優しい人だと憧れていました。

A君は、男の子達と虫取りに行ったりカードゲームをするよりも、私達とシール交換をしたり絵を描いたりする方が好きだったようで、ふと仲の良い女の子の一人が「男子達のところに行かなくていいの？」と聞いた時にも、「いいの、こっちの方が楽しいし」と笑いました。A君は、決して男の子達の中で浮いていたという訳ではなく、ただ一緒に遊ぶグループが違うというだけで、男の子達と楽しそうに話す姿もよく見かけていました。

そんなある日、とある男子がA君のことをからかい始めました。「何？お前オンナなのかよ！」と。小学生になりたての頃には無かった、性別の差による好みの違いを、彼は馬鹿にしたのでした。私達は、「あんなの気にしなくていいんだよ！」「言わせときなよ！無視無視」とA君に言ったのですが、A君自身もけろりとし

た顔で、「全然気にしてないよ」とスルーしていたので私達も安心して普段通りに過ごしていました。

しかしA君に対する扱いは、日を重ねるごとに酷くなっていきました。一人が言い出したことに次々と便乗していき、からかう人数が増え、言葉もきつくなっていきました。最初は気にも留めていなかったA君ですが、次第に笑顔が減っていきました。そんな彼はぼそっと「僕って変なのかな…」と呟きました。私は、その時彼に何も言ってあげられませんでした。

その後、私は父の転勤で引越し、A君がどうしているのか分かりません。ですが、もし、あの時の私がかつてのA君のように優しく声をかけてあげられていたら、状況は変わっていたのかもしれません。

A君のように、世間一般の感覚と違うという理由で、自分の好きなことを隠している人や、捨ててしまった人、からかわれて傷ついた人は沢山いると思います。誰にも相談出来ず思い悩み、引きこもり、社会に出ることが出来なくなってしまった人もいるでしょう。

私は、「男子だからこうだ」「女子なのにそれは」という壁のない、自分が好きなことを胸を張って、好きだと言える世の中になって欲しいと思います。

男、女という性別で決めつけるのではなく、一人ひとりの個性を尊重することが大切なのだと思います。

中学生となった今、私は彼が皆にしてくれたように、A君の気持ちに寄り添って笑いかけてあげたいです。

そして、小学生だった時の私には言えなかった「ありのままでいいんだよ」という言葉を、堂々と言いたいです。

最優秀賞（横浜市人権擁護委員会長賞）

当たり前を当たり前に

横浜市立篠原中学校　三年
天野葉月（あまのはづき）

世の中には様々な差別があります。肌の色や目の色が違ったり、障害があったりすると差別されてしまうことがあります。そしてその差別がいじめにつながってしまうことも多いです。

私は睡眠障害で小学校を長い間休んでいて、今も朝からは登校することができません。そのため、みんなよりも勉強のペースが遅れています。毎年クラス替えのときは、差別やいじめにあわないかとても不安でした。でも今は、そんな不安は一切ありません。私が午後から教室に入っても、クラスのみんなは笑顔で「おはよう」と挨拶してくれます。勉強の分からないところを教えてくれたり、休み時間には私のいない間の出来事を話してくれます。

修学旅行などの宿泊行事には参加することができませんが、事前学習や事後学習をして、クラスのみんなと一緒に新聞製作をしました。また、体育祭や合唱コンクールでは積極的に練習に参加したり、学級旗の色塗りを手伝うなどして、少しでもみんなと一緒に過ごす時間を増やせるように努力しています。みんなとは少し違う学校生活を送っていますが、差別やいじめにあったことは一度もありません。自分の努力だけでは埋められない溝もありますが、みんな普通に接してくれています。これが当たり前であってほしいけれど、そうではな

い人がいることを考えると、私はとても恵まれた環境で毎日を過ごすことができていると感じています。

社会に出ても、体にハンデがあると就職活動などで不利な状況になってしまうこともあります。本来、私たち子どもに差別はいけないことだと教える立場であるはずの大人が、差別をしていることもあります。障害のある人も一人の人間として自由に生きる権利があるのに、差別によってその自由を奪われてしまう人がたくさんいます。

人間は一人一人違った個性や事情があり、様々な環境で精一杯生きています。差別を完全になくすことは正直難しいかもしれませんが、自分との違いが大きいからといって排除しようとするのではなく、相手を認め、受け入れることができれば、差別で苦しむ人を減らすことができるはずです。

私は来年の春に中学校を卒業するので、周りの環境がガラリと変わってしまいます。その新しい環境で差別やいじめにあってしまうかもしれません。そうならないために、新しい仲間たちに私の事情や病気のことを全て話し、理解してもらえるようにしていきたいです。そして誰かが差別やいじめにあっていたら、勇気を出してその人を助けることができるような強い心をもって生きていきたいです。みんな違って当たり前。誰もがそう思える世の中になるように、自分ができることをしていきたいです。

最優秀賞（横浜市人権擁護委員会長賞）

「思いやり」を未来へつなぐ

横浜市立保土ケ谷中学校　三年
柳澤知里（やなぎさわ ちさと）

私は今年の夏休みの間、人の「思いやり」について考えるようになった。

夏休みが始まって四日目。私は病院で「舟状骨疲労骨折」と診断され、およそ四週間から六週間のギプスと松葉杖での生活を告げられた。その瞬間は、これからの不自由な生活のことを考えるわけでもなく、陸上部員である私は中学校最後の夏休みの練習ができなくなることをただただ悔やんでいた。

そして、次の日から部活や塾の夏期講習が始まった。部活は行きは朝だったため、親が車で送ってくれたが、帰りは仕事があるため一人で帰らなければならなかった。さらに、家が坂の上にあり、松葉杖で歩いて帰ることができなかったため、毎回バスを使って帰っていた。

塾は電車を使わなければいけない場所だったため、行きはバスを使って駅まで行き、電車を使って塾のある駅まで行かなければならなかった。そして、帰りは電車で駅まで戻り、駅からはバスで家まで帰らなければならず、公共交通機関をたくさん使わなければならなかった。

実際に、家に帰るために松葉杖でバスに乗った時、そのバスが少し小さかったり、利用客が多い時間帯だったりしたので、バスの席は空いておらず、立っている人も多かった。私も手すりなどにつかまって立っていよ

うとしたら、席に座っていた女性が、
「どうぞ。この席座ってください。」
と、席を譲ってくださった。私は、
「すみません、ありがとうございます。」
と言い、席に座った。このとき、女性の思いやりに胸が熱くなった。けれど、心のどこかでは、「自分のせいで周りの人に気を遣わせてしまった。」や、「申し訳ないな。」というような気持ちもあった。
家に帰った後、バスでの出来事や、そのとき抱いた感情を母に話した。すると母は、「今は怪我しているから、しかたないよ。だから譲ってもらったらきちんとお礼をして、怪我が治ったら自分が譲る立場になってね。」と言ってくれた。胸がすいたように思えた。
その後も、何回もバスや電車を使ったけれど、席が空いていない時は毎回といっていいほど誰かが席を譲ってくださった。
私はそのような人をいつも「すごいなぁ。」と思っている。私の中には、「バスや電車で席を譲る人は少ない」という固定観念があったからだ。
怪我をする前、バスや電車で体が不自由な人が乗ってきたけれど、席が空いておらず、座れなかった場面を見たことがある。席に座っていた私は、「席を譲ってあげるべきだ。」と、何度も思ったが、勇気が出ず譲ることができなかった。他の人も気づいてはいただろうけど、結局誰も譲ることはなく体が不自由な人は降りてしまった。その後も、席を譲れなかったことを後悔していた。
けれども、私がバスや電車に乗った時は、たくさんの人が席を譲ってくださっていた。

そのことを考えると、「自分だけ譲ってもらってばかりいてはだめなんだ。周りの人に思いやりをもって接しなければ。」と、心に誓った。

松葉杖での生活もそろそろ一ケ月が経とうとしている。松葉杖も一本になり、前ほど不自由なことはない。けれども、まだ席を譲ってもらったり、友達に手伝ってもらったりするなど、周りの人の助けのもとで生活している。

この経験を通じて、人の「思いやり」を身をもって感じることができた。だから今度は私がその「思いやり」を周りの人に届けたい。そして、未来へと消えることなくつながっていってほしい。

最優秀賞（横浜市人権擁護委員会長賞）

灯

横浜市立東鴨居中学校　三年
小池優花

「キャハハ」「めんどくさー。どうやって時間つぶす？」

これは私が修学旅行で訪れた広島の原爆資料館で聞いた声だ。私達と同じ修学旅行生だろう生徒から発されていた。

私は耳をふさぎたくなった。七十二年前、多くの人々が苦しみ、亡くなっていった地。その人々の記憶がつまった場所での笑い声や、聞き間違えたと疑いたくなる言葉。一つひとつが耳に響き、消えなかった。目をそらすな。そういわれているようだった。確かに、それが現実だった。

静かに流れる川、飛び立つ鳥、ときおりきこえる鐘の音。平和記念公園は穏やかだった。資料館で見た、生々しい写真やボロボロの服が、この場所で生まれたものなのか、と考えてしまうほど。私はそんな気持ちのまま、原爆ドームを見上げた。

言葉が出なかった。原子爆弾の爆風でとびちったがれき。東側の損傷が激しい姿。時が止まっているようだった。

資料館の展示物が次々と頭に浮かぶ。八時十五分のまま止まった時計、黒こげのお弁当箱、三輪車。全てが

今、自分がいるこの地でおこったことなのだ。

「無力だ。」

そう、強く強く感じた。

私達はその場で「聞こえる」の合唱をした。皆、何かを感じたのか、いつもとは違う合唱で、空へ吸い込まれていくような、どこまでも響くようなものだった。周りで見ていた方も拍手をくださった。海外の方々も。言葉は通じていなくても、一つになれた瞬間だった。同じ仲間なんだ、と改めて感じた。

今、世界にはたくさんの「核兵器」が存在している。それも、一度に全て落としたら世界が滅んでしまうという力だという。語り部の切明（きりあけ）さんは、こうおっしゃっている。

「今の世界は戦争の空気と似ている。」

確かに各地でテロ、紛争がおき、毎日のようにニュースに流れている。人と人が殺し合っているのだ。こんなに悲しいことはない。そして、日本も少しずつ戦争の影へと、のみこまれているのではないだろうか。平和が当たり前になっている日本。これからの日本を創っていく、そして唯一の被爆国である国の若者が、過去のあやまちの記憶の地で笑い、ふざけているのである。このままでいいのだろうか。私達は、戦争体験者の方からお話を聞ける最後の世代と言われている。平和がどれだけ大切か、戦争がどれほど恐ろしいか、次の世代へ伝えていくのは、この私達なのである。私は、中学一年生から平和学習を続け、その集大成として修学旅行で広島を訪れた。それでも私は広島の地でしか味わえない空気を知り、たくさんのことを吸収してきた。つまり、まだ知らないことだらけなのだ。私達が平和で明るい未来を創っていくためには、一人ひとりが、もっともっと過去について知らなければならないのだ。そうすればきっと、誰もが笑い、ふざけることがなく過去と真剣

に向きあえるではないだろうか。

広島の平和記念公園には、平和の想いを込めた碑や像が、数多くある。「平和の灯」という像は、人間の手から火が灯されている。この火は核を表し、核兵器を生み出すのは人間だが、それを無くすことができるのも人間。という核廃絶の願いが込められ、世界から核兵器が消えた時、この火は止められるという。そして、国境のない鐘、数えきれないほどの千羽鶴…。また、去年のオバマ大統領の訪問で海外から観光客が増えたそうだ。広島の地が世界へ平和を発信しているのである。

今日もまた、平和記念公園では八時十五分に鐘が鳴り、原爆ドームが静かにたたずみ、いつか平和の灯の火が消えることを願いながら、たくさんの魂とともに世界中へ平和の大切さを叫び続けている。

最優秀賞（横浜ＤｅＮＡベイスターズ賞）

国が違うだけで

横浜市立栗田谷中学校　一年
尹（いん）　愛里（あいり）

私は韓国人で日本とドイツとフィリピンのハーフです。

二年生の頃の話です。ある日、友達に自分が韓国人であることを話すとその話がまたたく間に広がっていき、みんなに驚かれたことがありました。その中には「すごいね」という声もありましたが、本人は面白がっているつもりで言ったのだと思いますが、「韓国人だ！」と大声で指をさしながら言われたことがありました。その時私は、二年生にして「みんなと違うからこんなこと言われるんだ」と思いました。このままじゃ、友達がみんな私から離れていってしまう恐怖とまたみんなから指をさされて何か言われるのがただ恐くて幼かった私にはどうすることもできませんでした。もちろん、私が韓国人だと知っても今までと変わらずに接しくれる友達もたくさんいました。しかし、またいつか言われる日が来ると思い自分を守るために考え抜いたのは誰にも言わないことです。

守り続けていたある日、とあるきっかけで英語を学ぶためフィリピンに一年間留学に行きました。その時通っていたインターナショナルスクールは韓国の学校でした。当時三年生で英語がまったく話せなかった私には、とても不安でした。そんな私に優しく声をかけてくれたのは、日本語が喋れる韓国人の学生の人でした。日本

語しか喋れない私にとっては、唯一の頼れる人で、学校のことについて教えてもらったり、時には相手が喋っていることを日本語に訳してもらったりと色々とお世話になりました。また、周りの人達も同じ韓国人やフィリピン人なので何かに怯えることもなくとても気が楽でした。

こうして、みんなと過ごしていくうちに今まで差別的な言葉を言われて怯えていた自分が馬鹿らしくなってきました。何故なら、国が違うだけで私の周りにいる人はこんなにも優しく素晴らしい人と同じ国籍を持っているからです。そう思うと、自分が韓国人であることが誇りに思えます。

一年経って、日本に帰ってきました。四年生、五年生と過ごしていき六年生になったある日、一番仲が良かった友達に「韓国人、韓国人あっち行け」と言われたことがありました。私は、とても悲しくてしょせんはこういうものなんだなと思い知らされました。言っている友達は、自分が今何を言ったのか、事の重大さに気づいていないのでしょうか。

正直私は、友達のその言葉一言で失望しました。しかし、留学していた頃に出会ったみんなのことを思うと「自分の勝手なイメージで決めつけて相手を馬鹿にしているなんて、なんて哀れな人なんだろう」と思いました。

今も私は自分のことを人にいうのは少し怖いです。でも、ずっと怖がっていても自分から友達に歩みよることはできません。なのでこれからは自分のからにずっとうずくまっているのではなく、自分らしく生きていきたいです。

最優秀賞（横浜Ｆ・マリノス賞）

世界のことをもっと知りたい

横浜市立東山田中学校　一年
松岡　悠

「中国旅行なんて心配だねぇ。」
と祖母が電話で僕に言った。夏休みに僕と姉と母で父が駐在している中国に遊びに行った時のことだ。グアム旅行に行った時は、気持ちよく見送ってくれたのに、今回は違った。祖母は、テレビなどで、中国の人のマナーの悪さや、日本人に対するデモを観て心配してくれていたのだ。

僕は、小さい時に中国に住んでいたが、嫌な思いはしたことがない。もちろん、祖母が心配するようなこともある。慮溝橋事件や終戦記念日は、外出をひかえていた。父は、タクシーの運転手に日本人かと聞かれ、たまに偏見もあるので、シンガポール人だと答える時があると言っていた。また、街はゴミが多くて衛生面に心配がある場所もあった。でも、違う面もたくさんあるのだ。

母と姉と僕と中国の路線バスに乗ったとき、
「請座、請座。（座って座って）」
と席をゆずってくれた。おじいさんが乗ってくると、別の人がさっと席をゆずる。小さい子供とお年よりにみんな親切だ。日本に帰国してから、そういう光景を見たことがない。また、中国の人達とレストランで食事を

していたとき、父の携帯電話がなって、父はつい電話に出てしまったのだ。すると中国の人に
「松岡さん、ここでは、電話はだめですよ。」
と注意されてしまった。父もついつい油断してしまったらしい。
僕はたまたま中国に住んでいたから報道が全てではないことがわかる。でも、自分が行ったことがない国に対して、よく知らないのに差別的な発言をしたことはなかっただろうか。僕には、自信がない。
今の僕にできることは、世界を知るために学ぶことだ。なぜ、中国で日本人が外出しないほうがいい日があるのか。歴史的に何があったのか知れば、行動も発言も変わってくる。世界のそれぞれの国の地理や歴史を知れば、いろいろな角度で物を見たり、考えたりすることができると思う。
もう一つ、言葉も大切だ。中国人の家族とマカオに旅行したとき、僕はゴードンという高校生とツインルームに二人きりで同室にさせられた。父達が勝手に決めたのだ。
「国際交流として二人で過ごしなさい。」
ゴードンは英語を話せたが、僕はできない。スマホの通訳機能を使いながら意志疎通をした。英語が話せれば、もっと楽しくすごせたのにと思う。いくら知識や気持ちがあっても相手に伝えられなければ意味がない。
いろいろな国のことをたくさん知って、自分自身の考えを持ちたい。テレビで観ただけとか、ネットで検索しただけのかたよった情報のまま差別的な発言をしないようにしたい。僕たち世代がこころがければ、相手の国の個性を尊重できる、そういう社会を作っていけるのではないだろうか。

最優秀賞（横浜ＦＣ賞）

小さな人権

横浜市立並木中学校　二年
香川（かがわ）　ねむ

自分にとって何気ない言葉。これが原因で傷ついた人がいます。自分の優しさもそれが原因で傷ついた人がいるならば、それは優しさではなく、人の心を傷つける凶器です。そして、この行いは隠れた人権侵害だと思います。

私が隠れた人権侵害について考えたきっかけ。それは、横浜子ども会議です。これは、小中学生がいじめの問題について考える会議で、今年度は「もう一度、いじめの問題に向き合い、自ら解決しようとする子ども社会をつくろう」というテーマのもとで行われました。会議の中でいじめをなくすための活動や、身近で嫌な思いをしている人がいないかなどを話し合う中でこのような質問がありました。それは、「私たちも知らず知らずのうちに人に嫌な思いをさせていることはないでしょうか。」という質問です。これに対して、皆で考えてみると、「少しきつい言い方で話した事があるかもしれない。」「別の事に集中していて、話を無視した事がある。」と、普段の私達が「いじめ」と呼んでいるものとは比べ物にはならないほど小さな事が出てきました。私達が「いじめ」と考えると、人に暴力を振るったり、集団での仲間はずれなどの大きな事が思いつきます。でも、この会議で出て来た事のように、小さくて見えない、気付かないいじめこそ、私達がもっと注意するべきでは

ないのかと思いました。よくよく考えてみると、会議に参加している人はほとんどが思いあたる節があったからです。私も友達の冗談に腹がたって、きつい言い方で返した事があります。その時は頭に血が登って、相手が悪いとしか思っていませんでしたが、後から冷静になって考えてみると、私は友達がどんな気持ちで冗談を言ったのか知りませんでした。明るい友達の事です。「その場を楽しくしたい。」や「私を笑わせたい。」と思っていたのではないでしょうか。もしかしたら、少しいたずら心があったのかもしれません。どれにせよ、悪気がなくやった事なのに、衝動にまかせて強く言い返した事を、私はとても後悔しています。私のした事は大小関係なく、いじめと変わりない人を傷つける行為だからです。いじめはしてはいけないと思っていた自分が人を傷つけていたと思うと、悲しいです。

反対に、私も相手の無意識な言葉で傷ついた事があります。私自身の事を言われるのはもちろんですが、私が一番嫌な事は人の悪口を聞かされる事です。「あの人って調子にのってるよね。」や「うざい。」など、よく友達の悪口を聞かされますが、それを共感しているふりをしてうなずいて聞いていたり、それに対して、注意が出来ない自分に腹が立つし、そんな自分が嫌です。また、「私なら分かるよね。」と言われると、自分は友達にそんな風に思われているんだなと思い、とても傷つきます。

隠れた人権侵害はとても見つけにくいものです。人はとても繊細で、小さな事でもすぐに傷つくのに、相手が何を言えば傷つくのか、心の読めない人間には分からないからです。子ども会議の閉会式。校長先生が「人を『思う』人ではなく、『想う』人になってほしい。」とおっしゃっていました。「思う」と「想う」似ているようで少し意味が違い、前者は自分の意見や考え、つまり、「自分の脳の中で感じる心。」という意味があり、後者は他人の事、つまり、「相手を想う心。」という意味があります。自分ではなく、人の気持ちを考えたり、

人の気持ちに寄り添ったりと、人を想って行動する事は、小さないじめを無くす、大きなきっかけになると思います。だから私は、人の気持ちを考えて行動し、人を想える人になりたいです。そして、もしそれが裏目に出てしまったら、素直に謝り、反省し、次へ活かしていきたいです。そして、ゆくゆくは小さな人権侵害がなくなり、誰もが「想う心」を大切にできる社会にしていきたいです。そのために、この事をより多くの人に伝え、これからの「いじめ」のない社会へ向けての解決策を考え、実行していければと思います。

最優秀賞（横浜ビー・コルセアーズ賞）

支え合うこと

横浜市立山内中学校　三年
川田　凜

「長生きして申し訳ない。」

一人暮らしをしている八十歳を過ぎた私の祖母は、時々この言葉を口にする。

祖母に長生きしてもらって私は嬉しいのに、どうして謝るのだろう。

テレビなどを見ていても「早く逝った方が……。」「生きていても……。」という高齢者の声を聞く。どうして生きていることを悪く思うのだろうか。

私の母は看護師をしている。来院する患者さんの中にも「なかなかお迎えが来なくて……。」「迷惑ばかりかけて……。」と話す高齢者の人達がいるそうだ。そんな中「私なんて何の役にも立っていないから申し訳ない。」と言ったおばあさんに対して、院長先生は次のように言ったそうだ。

「○○さんがこうやってここに来てくれることで病院の収入になって私たちは給料をもらえるんですよ。薬を飲んだり、ご飯を食べたりするのだって、そのおかげで作った人の利益になるんです。○○さん、十分役に立っているんですよ。」院長先生にそう言われたおばあさんは笑顔になったそうだ。

私は母からこの話を聞いて、感慨深い気持になった。同時に私も、必要とされない人なんて誰一人いないと

思った。

私は昨年、学校の職場体験で福祉施設の高齢者デイサービスの仕事を体験した。少子高齢化が進む日本に、これからも生きていく私にとって、多くの発見がある良い経験になった。お茶を運んだり、車いすを押したりすると、高齢者の人は「悪いねぇ」と言って、その時も謝っていた。

できる人ができない人をフォローして支える。当たり前のことだ。支えてもらったのなら「ありがとう」の言葉でいいと私は思う。

人は生まれた時から誰かに支えられ、大人になり、老いていく。老いていく中でまた、人は誰かを支えている。そうして支えあって私たちは生きているのだ。その支え合いは、性別、年齢、国などに関係なく、常に行われている。私も、顔も知らない誰かを支え、顔も知らない誰かに支えられている。生きているうえで迷惑なことなどないのだ。むしろ高齢者の人たちは、長い人生の中で多くの人を支えてきたのだから、残りの人生で多くの支えを受けて当然だと私は考える。

平成二十七年に発表された日本人の平均寿命は、男性八十・七九歳、女性八十七・〇五歳で共に過去最高を更新し、世界上位にあたる。これはとても誇らしい事だ。しかし翌年に発表された「世界幸福度報告書」で日本は百五十七ヶ国の中で五十三位で、先進国の中でもかなりの下位であり、前年度よりも悪化している。これは老後への不安がとても大きく影響しているそうだ。日本にいる高齢者が、自分が生きていることへの価値を見い出せないというのは悲しいと思った。

私が多くの人に支えられているように、私も多くの人を支えたい。そうして老いていっても幸せに、生きがいのある暮らしのできる環境になっていってほしい。

優秀賞

ヘアドネーション

横浜市立森中学校　二年
榎本（えのもと）　詩絵瑠（しえる）

あなたは、「ヘアドネーション」という活動を知っていますか。「ヘアドネーション」というのは、病気や不慮の事故で髪を失ってしまった子どもたちの医療用ウィッグのために、髪を寄付することです。

私は、中学一年生のときにこのボランティアに参加しました。きっかけはテレビのある番組で「ヘアドネーション」についての特集をやっていたときに、母に「これ、やってみたら。」と、勧められたことでした。「ヘアドネーション」に必要な条件は「十二インチ以上の髪があること」「髪が濡れていない事」「引っ張っても切れない程の強度がある事」だけで、誰でも簡単に参加できるものでした。

その番組を見たときは、ちょうど髪を伸ばしているときだったので、「どうせ捨ててしまうなら、誰かの役に立てたい。」と思い、参加することにしました。

十月、ついに髪を切ることになりました。私は母と一緒にボランティアに賛同している美容院に行きました。美容院で席が空くのを待っている間ずっと、「この髪が誰かの役に立つんだ。」と思うとどきどきして、とても嬉しくなったと同時に、少し緊張しました。

少し前に、「愛してるよ、カズ」という動画を見たことがありました。この動画は、カズくんという、小児

がんにかかった男の子の闘病生活の一部を記録した動画です。私はこの動画を見るまで、小児がんがどんなものなのかを全く知らなくて、このときはじめて知りました。カズくんが辛そうにしているところや、カズくんの両親が泣いているところを見ると、胸が締め付けられる思いでした。

小児がんで助かる子どもは七割で、残りの三割の子どもたちはみんな亡くなってしまうそうです。私は「短い時間をできるだけ楽しんでほしい。そのために自分のできることをしたい。」と思いました。

美容院で髪を切ってもらっている間、私はカズくんのことを思い出し、小児がんの子どもたちが少しでも明るく、楽しい時間を過ごせるようにするために、ヘアドネーションは自分のできる唯一の方法で、大切な活動なのだと強く感じました。

髪を切り終わると、今までずっと一緒に過ごしてきた長い髪がなくなって頭が急に軽くなったので、少し落ち着きませんでした。しかし、ついに自分の髪がウィッグになると思うと本当に嬉しくなりました。

髪を切るだけで誰かの役に立てるというのはとても素晴らしいことだし、簡単にできるので、ヘアドネーションをこれからも続けていこうと思います。

優秀賞

祖母の笑顔のために

横浜市立岡津中学校　三年
大石（おおいし）　元（はじめ）

町を歩いていると、片方の手が内側に不自然に折れ曲がっている方をよく見るようになった。その方々は歩き方もゆっくりで不自然だ。つえをついている方もいる。今まで気にならなかった事が、祖母が病気で倒れた事で、気が付くようになった。これらの方は、脳卒中の後遺症と戦っているのかもしれないのだ。

祖母は、今年四月に脳卒中で倒れた。現在はリハビテーション病院に入院し、回復を目指している。愛知県にいるのでなかなか会えないのだけれども、この夏、祖母に会いに行った。「寿司が食べたい。」という祖母を連れ、外出許可をもらって外出した時のことだ。駐車場に車を止め、祖母を車イスに乗せていた時、広い道があるのに近道だといわんばかりに横をすり抜けようとする家族がいた。祖母はリハビリ中で、まだ体が不自由でゆっくりにしか動くことができなかった。祖母は、待たせている人達に向かって申し訳なさそうに、「ごめんなさい。」と謝った。車イス専用駐車場での乗り降りなのに。「大丈夫ですよ。」と言って待ってくださる方、「じゃまだな。」と顔に出て無言ですたすたと窮屈そうに通り抜けていく方など、様々だ。

体が不自由になっただけで祖母は何も悪いことをしていないのに謝ってばかりいて「とてもかわいそうだな。」と思った。

店内でイスに座る時にも、車イスからの移動はゆっくりで、車イスを畳んで横に置くまでの間に通りかかった方々に「ごめんなさい。」と謝っていた。そんな中、こんな親切な方に会った。入口に近づくと笑顔で扉を開けてくれて、「お先にどうぞ。」と、その方は声をかけてくださった。祖母は「ありがとう。」と言った。その方にとってはちょっとした事だったと思う。でも、その一言が祖母を笑顔にさせたのだ。僕は自然とこういう事が出来るその方のことを「すごいな。」と思った。

入院中で不自由な体になって外へ出て行く事が少ない祖母。元気な時と比べて、車イスに乗っている時は目線も違う。歩く時には体が思ったように動かずもどかしい。外出するたびに不安になってしまうのだろうと思う。そんな時に僕はなんて声をかけていいのか分からなくなってしまう。いつもは祖母に会いに行くと、学校であったこと、友人のことをずっと話しているのに、それすらできなくなっていたのだ。

町で見かける体の不自由な方々に、僕はあの方のように、自然に声をかけて笑顔で気遣いができるだろうか。今までは、どうしていいか分からないし、断られたら嫌だと、勇気がなくて見守っているだけだった。でも、これからは僕に手伝える事があれば積極的に声をかけてみようと思う。あの時の祖母が嬉しそうだったから。

優秀賞

外国人への意識の変化

横浜市立新田中学校　二年
加藤（かとう）　かりん

アパートへの入居を外国人であることを理由に拒否された、というニュースを見たのはそんなに昔のことではない。外国人への差別、その言葉を聞いて自分がつい最近まで住んでいたアメリカを思い出した。

私が住んでいたアメリカで通っていた中学校では、何かがおこるたびに差別の禁止の話があり、実際学校のルールでもあった。でもこれは外国人への差別という表現ではない。人種、年齢、性別、宗教、肌の色、障害の有無など非常に細かい。何故ここまで書かれているのか、最初は分からなかった。しかしアメリカの歴史を学んだり先生たちの話を聞く中で、アメリカの歴史は差別との戦いの歴史であることも分かってきた。それは現在もまだ戦っている最中と言えるだろう。

私は幸いなことに住んでいた四年間で差別を受けたと感じたことはなかった。ただ、私はずっと疑問に思っていた。どうしても英語という言葉のハンデがある自分。毎日宿題は意味がわからないことだらけだし、授業もノートを書き写すことで精一杯だった。なんでこんなことをしなくちゃいけないんだろうと泣く日々もあった。ただ、学年で日本人は自分しかいなくて言葉もうまく通じない中、それでも親しくしてくれた子がいた。彼女は生まれてからアメリカにしか住んだことがない白人の女の子だったが、何故か自分に事あるごとに話し

かけてくれたし、二人ペアになって課題に取り組むような場合も必ず私に声をかけてくれた。私も勇気をだして話しかけてみたり遊びに誘ったりしたし、輪も広がってゆき、とても充実した四年間を過ごせた。

ある日、彼女に聞いてみたことがあった。なぜ言葉も通じなかった自分と親しくしてくれたのか。その答えに私は驚いた。だって、気が合いそうだと思ったし、あなたこそ私に話しかけてくれたじゃない、と。

何故アメリカで細かく差別を禁止するルールが設けられているのか、それはそれだけ差別が社会に根づいていることを意味していると思う。そもそも差別の根本的な理由は何だろうか。それはその国それぞれの歴史的な背景もあるだろうし、他人より優れていたいという人間の根本的な欲求から来ているのかもしれない。でも、それは自分が差別を受けるかもしれない立場に立って初めて差別の怖さや絶望感を味わうのだと思う。

差別を完全に無くすことは難しいことなのかもしれないが、アメリカでの私の友達の振る舞いが一つのヒントである気がしている。外国人のアパートへの入居にしても、その人が入居ルールに反していない限り、アパートに入ってくれるお客として考えればありがたい話である。

日本にはすでに二百三十八万人もの外国人が住んでおり、年々増加していると聞いている。その人達のおかげで日々の生活や暮らしを支えられている日本人も多いと思う。

外国人に対する差別を無くす第一歩はまず自分たちの心の中にある意識を変えることだ。アメリカの彼女がそうであったように、まずは同じ人間として相手をしっかり見て、話をし、理解することから始めることだろう。すると国や習慣は違っても、同じ人と人として分かり合えること、もしかして誤解があったことなどに気づくことが出来るかもしれない。捨てるべきは変な先入観で決めつけようとする心なのだと思う。

日本は少子化と言われていて、日本人だけでは私たちが大人になる頃には大変なことになっているかもしれ

ない。外国人と理解し合い差別を無くすことはより多くの素晴らしい外国人に日本に来てもらうチャンスにもなるし、私たちの将来にとって必要不可欠なことなのである。

優秀賞

私の小さなものさし

横浜市立早渕中学校　二年
神谷綾音

「怖い。」これが以前まで私がいわゆる「黒人」に対して抱いていたイメージであった。私は小学生の時、自転車に乗った黒人男性とぶつかったことがあった。私は遊歩道を真っすぐに歩いていた。横には充分なスペースがあったにもかかわらず、その人はそのまま私の真っ正面にぶつかってきて、私は転びそうになった。しかし、その黒人は何も言わずに、こちらをにらみ、去っていってしまった。このことがあってから、私は「黒人は思いやりのない怖い人なのだ。」と思うようになってしまった。しかし、ある事を境にその考えは一八〇度変わったのだ。

それは、今年の六月、アメリカ人の留学生が一週間私の家に滞在することになったことがきっかけだ。まさかその留学生が黒人だとは思いもしなかった。私は正直に言って、過去の出来事を思い出し、「その子は怖いのかな」とか「仲良くなれるかな」と少し不安を抱いた。

そして、留学生「アンソニー」が私の家にやって来た。「いざ」と思い切って英語で話しかけてみると、アンソニーは、まゆげを大きく上げて、笑顔で「ＨＩ！」と返してくれた。明るく満面の笑みで話してくれたことがとてもうれしかった。彼は私が咳が出た時など、どんなささいなことでも「アーユーオーケイ?」と声を

かけてくれた。また、私がお茶を出してあげたりすると、必ず「サンキュー」と返してくれた。彼は表現力が豊かでストレートであったため、難聴の私には何を考えているのかとても良く分かり、助かった。このように、アンソニーは私の黒人に対する考えを正してくれた。当たり前であるが、同じ黒人でも性格や物事に対する考え方は、人によって全く違うのだということに気づかせてくれた。私は、たまたま出会った礼儀知らずの人を基準に「黒人は怖い」と決めつけてしまっていたのだった。

黒人は私たちと同じ人間である。しかし、奴隷として商人たちによって売買され、農業の働き手として、また白人家庭の使用人として利用されていたという悲しい過去がある。現代のアメリカでも黒人男性がいきなり何の落度もないのに、白人警察官に発砲されるなど警察に目をつけられたり、サルと呼ばれたりなどまだまだ差別が続いており、人としての権利がないがしろにされているのが現実だ。

黒人だけでなく、アジア系の人なども差別の対象となることもある。私の母は、高校時代にアメリカに留学した時に、黄色人種ということで「ジャップ」と呼ばれた事があったという。また、私の中国人の友達は日本のレストランで中国人ということだけで、お水を出してもらえなかったり、お皿の置き方が雑だったりということがあったそうだ。

この世界には「差別」で心を悩ませる人は一体どのくらいいるのだろう。きっと数えられないほどの人が苦しみ悶えていることだろう。どうしたらなくすことができるのだろうか。なぜ「差別」は起きるのだろう。

それは、かつての私のように、相手の外見や、今までの経験に基づいた考えだけで相手のことを決めてしまう人がいるからだと私は考える。肌の色や髪の色、目の色、生まれた場所によって差別されてしまうのはおかしいと思う。それらは自分で決められない運命なのだから。狭い視野や浅い経験によって作られた「ものさし」

で物事を計ろうとせず、もっと広い視野で世界を見渡すことが大切だと私は思う。私の場合は留学生アンソニーが私の小さい「ものさし」をとりはらってくれた。相手のことをよく知ろうと努力し、相手の良い所を探し出すこと。これが今よりも差別を減らすために私達ができることだと私は信じている。

優秀賞

祖父が教えてくれたこと

横浜市立南高等学校附属中学校　三年
菊地龍斗（きくち りゅうと）

「あんな人等と話すのは嫌だな」

これが、今までお年寄りや障害者の方に向けていた私の思いでした。自分でもさすがに酷いな、と思うほどでした。まさか自分の祖父があんな風になってしまうとも知らずに。

私は祖父が大好きでした。弟が生まれるまでの三年間、働いている父母に代わってよく母方の祖父母に面倒を見てもらっていました。そんな中で、祖父は私をよく外へ連れ出してくれました。とても楽しい時間だったと記憶しています。しかし、五、六歳になって人の言葉の意味をより一層理解できるようになった時、お年寄りの呂律があまり上手に回っていない喋り方に私は嫌悪感を覚えました。言葉が鮮明に聞き取れず、内容の理解が難しかったからです。そんな印象は成長しても拭い切れませんでした。だから、私の祖父が「認知症」になって、何を言っているのかわからない時、私はとても複雑な気持ちになりました。

三年前、出かけていた私と両親に祖母から「祖父が暴れている。来て欲しい。」と連絡がありました。家に帰った時、私が見たのは変わり果てた祖父の姿でした。彼はテレビの電源を入れる方法を忘れ、祖母の名前を大声で叫びながら杖を振り回していたのです。私はどうすることもできず、ただただ唖然と突っ伏していることし

かできませんでした。

その後、祖父は色々な施設に入りました。最初の頃は怒鳴れるくらいの元気があった祖父でしたが、環境の急な変化の為か痩せこけ、ベットから起き上がれない時もありました。私はその姿を見て、思わず涙がこぼれました。

施設に私が訪ねた日に、私は祖父のガリガリに痩せて骨がゴツゴツの手をそっと握り、「頑張ってね」と声をかけてあげました。私にできることはないのだろうか、少しでも役には立てないだろうか。その日はずっとそんな言葉が頭を支配していました。とは言うものの、私には介護の知識なんてないし、所詮私は無力なんだ、と思い知らされました。それでも私にできることだってあるはずだ、そう思って毎日時間さえあれば考えていました。そしてついにわかったんです。とても簡単なことだけど。私にできる事、それは、ただ傍に居て話を聞いてあげて優しくすることでした。祖父は家から少し遠いところの老人ホームに入り、会える機会が少なくなりました。だからこそ、会った時は沢山優しくしてあげます。

ある日、祖父の元を訪ねると、いつもは私のことを父の名前で呼んだりしていたのに、その日は「龍斗、来てくれたのか」と笑顔で言ってくれました。とても嬉しくて、涙が溢れ出しそうになる程で、その日はいつも以上に優しく接しました。

こうして祖父と一緒に居ることで、お年寄りの方や障害者の方への接し方が少しでもわかった気がします。そのおかげで、最近ではお年寄りの方や地域の方々と上手に話せるようになりました。老人ホームに行った時も、全く知らない患者さんともあいさつやお話をすることができるようになり、その点ではとても祖父に感謝しています。こんなに大きくなるまで、時には間違われることもあったけれど、一緒に居てくれて優しくして

くれた祖父。そのことにもそうですが、特に今回のことには、感謝してもしきれません。

祖父が私に教えてくれたこと、それは「人を思いやる優しい心」でした。

優秀賞

二〇二〇年に向けて

横浜市立みたけ台中学校　二年
笹井（ささい）　夢（ゆめ）

父の海外赴任がきっかけで、私はベルギーに移住した。言葉の通じない地で生活していくことには戸惑ったし、何より日本とは全く文化が違うことに驚いた。小学校は、日本人学校ではなく現地の学校に通った。周りには様々な国の子供達がいた。それまで私は、国籍が違う人とはコミュニケーションをとることはできないと思っていた。言葉が通じないし、お互いの文化も、容姿も違うからだ。しかしそこの子供達は、国籍の違いに囚われずお互いの違いを個性として認めて、それを受け入れあっていた。そして、ただ一人の日本人である私を受け入れ、文化にも興味を持ってくれた。そうして皆と関わっていく中で私は「お互いの違いを個性として捉え、受け入れる」ことの大切さを学び、ベルギー人の親友もできた。

彼女はもともと日本文化が好きだったが、私に会ったことでさらに興味を持ってくれた。現在も文通は続けているし、将来は一緒に日本を観光したいとも言っていた。

数日後、インターネットであるニュースを読んだ。法務省が実施した外国人差別の実態調査についてだった。そこには、外国人というだけで入居や就職を断られた、差別的な発言をされた等の実態が書かれていた。もし彼女が日本に来て「外国人だから」という理由だけで差別されてしまったら、同じように興味を持ってくれた

人がこのような体験をしてしまったらと思うと、とても悲しかった。

日本人は歴史的に異民族との関わりを経験することが少なく、異文化に触れることもあまりなかったため、それがこういった差別に繋がっているとされている。

しかし私はベルギーで、容姿や文化が違ってもそれを受け入れ、国籍に関係なく友達になれるということを体験した。

このような差別は、私が体験したように「お互いの違いを個性として捉え、受け入れる」ことができたらなくなるのではないか。そのためにはまず、異文化に触れ、偏見をなくすことが大切だと思う。

差別的な発言の中には、その国の文化を侮辱するようなものもあるという。これらは、お互いの文化についての正しい知識を持ち、偏見をなくすことが重要だと思う。その上で、「お互いの違いを個性として捉え、受け入れる」ことができれば、差別はなくなると私は考える。これは、他の問題に対しても言えることだと思う。

二〇二〇年に東京五輪を控え、日本は外国人との交流も増えつつある。これは、外国との交流を深め、異文化を吸収するチャンスだ。その時に、日本に来てくれた外国人に精一杯おもてなしをできるようにすることが、今の課題だと思う。

そして将来、親友にたくさんの日本文化を教えられるよう、語学に励むのが私の目標だ。

優秀賞

残った傷跡

横浜市立神奈川中学校　三年
嶋澤緋里

イヤフォンで音楽を聴きながら、私は塾へ向かっていた。あいにくの雨だったが、好きな曲のサビが流れ始め、気分は上々。と、数秒後、突然聞こえた笑い声に曲が遮られた。

何事かと思い振り返ると、斜め後ろ辺りで高校生くらいの男子四名が、芸をしているらしい一人を囲んで笑っていた。何をはしゃいでいるのだろうと思いつつ、歩きだそうとした時、「もう一回やるから見てろよ！」と言う声がした。芸をしていた一人が、一〇m程先を歩いている人を指さしながら、さっきと同じ動きをして他の四人を笑わせていた。指さす先には、白い杖を足下の前で左右に動かしながら歩く人がいた。

私はすぐに、目の不自由な方だとわかった。そしてその瞬間、右手に持っていた傘を落としそうになった。よく小説の中に出てくる、白黒の世界になりそうだった。高かったテンションが急激に下がった。

そこに居合わせた、親子、四〇代位のサラリーマン、買い物帰りの主婦、そして私は、その一団を冷ややかに見つめた。

「やめてください。」心の声を、私は実際の声にすることができなかった。たった一言を言う勇気がなかった。この時、今まで生きてきて、自分を一番惨めだと思った瞬間だった。

障害をネタに仲間を笑わせていた高校生が、私や、他の人たちの突きさすような視線に気づき、あせり出した。その異変から、ゲラゲラと笑っていた他の四人も周りの冷たい視線に気づき、五人はコソコソと去っていった。

私が再び歩き始めたときには、イヤフォンから流れる曲は、次の曲に変わっていた。あわてて時計を見て、びっくりした。今すぐ走らないと塾の時間に間に合わないリミットになっていた。私はスマホを右手に握り、全力で走りながら考えていた。

五分以上立ち止まって彼らを見ていたんだなと。五分もそこにいて、何もできなかった自分にイラつきながら、右手で握りしめた、傘の取手の固さを、今も鮮明に覚えている。

このような気持ちになったのは初めてだった。言い訳は何もない。あの時、私は、目の前で起きたことを、ただ見ていることしかできなかった。『傍観者』だった。

もともと、私は、部活仲間にちゃんと注意もできない弱虫だ。部活仲間だけではない。クラスで一緒に行動している友達にも、自分の思っていることを言えず、友達の意見やペースに合わせてばかりだ。時にはぶつかる勇気が必要だとわかってはいるけれど、ぶつかるのをさけてしまう。

しかし、今回の出来事で、少しの勇気を持ちたいと、改めて強く思った。また同じようなことが起こったときに、一歩踏み出す勇気がほしい。

私は週に一度、習い事のため部活を途中で切り上げて、早く下校する日がある。その下校中によくお会いする障害のある方と、その付添いの方がいらっしゃる。その方が落としたタオルを私が拾って差し上げたのをきっかけに、すれちがう時にあいさつをするようになった。時には、あちらから話しかけられる時もある。私は初

め、どう接するべきか戸惑っていた。すると、付き添いの方から、「普通に話してあげてください。」とやわらかな声で言われた。

勇気のない私だけれど、「普通に」話すことならできる。「普通に」話すことで、誰かとつながり、役に立てるなら、それは私にもできることだった。

とはいえ、やはり最初の一言を話し出すには、少しの勇気が必要だった。でも、何度かお会いするうちに、自然にあいさつができるようになっていた。

障害のある方々の苦労を、本当にはわかっていない私だけれど、「普通に」話しかけることが、その方を理解する一歩になった。

これからも自分のできることをして、一歩ずつ理解を深め、勇気を育てていきたい。そして、自分のできることを増やして、必要としてくれる人の役に立てる人間になりたいと思う。

優秀賞

座れる権利

横浜市立南高等学校附属中学校　二年
関根史華

突然言われた。

「せっかくゆずってもらったのになんで座らないんだ！」

正直驚いた。私は私が思う正しい行動をしたのに……。

混雑したバスの中で一人のおじさんが優先席を立ち、私にこう言った。

「どうぞ」

だが私は座らず、にっこりと

「大丈夫です」

と返事をした。そのわけは二つある。一つ目は、自分の考えとして優先席は体の不自由な人やおじいさん、おばあさんが座るところだと思っていたからだ。だから、混雑していても座りたい人のために空けておく。二つ目は、優先席に座ることを恥ずかしく感じてしまったからだ。つい周りの目を気にしてしまう。そんなとき、その立ったおじさんの隣の人からそう言われた。最初は「え？なんで……。あの人なんなの」と怒りがふつふつと込み上げてきた。反論したい気持ちでいっぱいだった。だが、私はだまってしまった。その隣のおじさん

は続けてこう言った。
「ここはじいちゃん、ばあちゃんが座るところだと思っているだろ。だいたいそこに立ってる方が邪魔だよ。」図星だった。もうこれ以上言われたくない、私はそう思って優先席に座った。最初は恥ずかしいと思っていたが、怒られて仕方なく座る方がよっぽど恥ずかしかった。
帰宅して、私は今日の出来事を振り返った。あのときは混乱していて、自分の行動が否定されたような気がして、怒ることしかできなかった。だが、冷静になってみて「本当は優先席は誰のためにあるのだろう」と感じた。私のように優先席は自分が座るところではないと思っている人が多いのではないか。今まで考えたことのなかった疑問が私の中で湧いた。
学校で授業中にクラスで優先席の話になった。先生が私達に
「優先席ってみんな座るのか。」
となげかけた。みんなは、「ほとんど座らない」と言っていて、私も同感だった。先生が
「先生さ。ときどき座るんだけどさ。ちょっと座ったときに『いいのかな』って思うんだよな」
と言っていた。私もあのとき「本当に自分があそこに座っていいのか」という気持ちが、あったから素直に座れなかったのだろう。続けて、
「若い人が座るところではないという先入観があるけど、具合が悪かったり外見からは見えない理由があったりして座っているのだから先入観で決めつけちゃダメだよな」
と言っていた。ネットで最近は、優先席のトラブルが多いのだと知った。先生が言っていたことだが、具合が悪かったり外見からは見えない怪我をしているのに「なんで座っているんだ！」と怒られたり、若いというだ

けで「立ちなさい」と言われたりすることが多いようだ。また、周りの目が気になって座れない人がいる。そうして、優先席に座れるはずの人が座れないということが起こっており優先席の意味が変わってきているのではないか。

座る人の対象が、時と場合によって変わる優先席。だが、このふとした話から私が思ったのは「誰でも座れる権利がある」ということだ。自分が座るところではない。最初は躊躇していた自分だが、時と場合によって使い分けることが大事であり、席を譲ることが必要であると思った。

私は注意してくれたおじさんに会えて良かったな、と今になって思う。なぜなら、これから生きていく中で教訓になったからだ。それを中二の時に知れて、気付いて良かった。混雑したバスの中で座るのを避けてきた。いつも

「座っていいのかな?」「やっぱやめておこう」

の繰り返しだった。そのサイクルが今回途切れた気がしてスッキリした。多くの人達が私のようなサイクルに困っているのではないか。だからこそ、その人達に私は

「座っていいんだよ。」

と伝えたい。それで周りの人がどう思うかは知らない。時と場合をわきまえて座るならいいのだ。なぜなら、一人一人座る権利を持っているからだ。だから、もし罪悪感があるのなら席を譲ればいい。

これが私の学んだこと。知ったこと。伝えたいこと。

優秀賞

清らかな水

横浜市立都田中学校　三年
沼田欧介

浦島太郎はかわいそうだ。いじめのニュースを見ながら、ふとそう思った。いじめた人、いじめられた人、そして周りにいた人、とよく分類される。それでいけば、浦島太郎は周りにいて、しかも止めに入った人だ。いじめられていた亀を助け、お礼に竜宮城に連れていってもらい、楽しいひとときを過ごして帰ると、数年の月日が過ぎている。もらった玉手箱を開けると、老人になってしまう――。家族も友達もいなくなってしまった場所で、突然おじいさんになってしまった浦島太郎を、あの後、誰が助けたのだろう。

母は、僕が小さい頃から、「良い行いをすれば、必ず自分に返ってくるものだから、人には強く優しくありなさい。」と言い続けてきた。それが正しいことだと僕は知っている。だから、浦島太郎の終わりかたは長いこと不思議だった。今、あれこれ考えてみると、この物語は、いじめられる人を助ける大切さだけでなく、助けようとすることの気遣いや感謝の大切さを教えてくれているのではないかと思えてきた。いじめを知っていて放っておくのは良くない。でも、止めに入るのは簡単ではない。そんな勇気のいる良い行いをした人こそ、みんなで称賛し、労い、励まさなければいけない。そうすることで、いじめを止めようとする人も増えていくだろう。いじめを止める人が一人しかいない世界より、百人、千人、もっとたくさんいる世界の方が、いいに

決まっている。そして、そういう人の増えた世の中には、いじめは生まれにくいし、生まれてしまっても育ちにくいと思う。深刻な事態になる前に、誰かが助けてくれるのだ。いじめを一気になくすのは難しくても、これなら実現していけるのではないかと思う。

ある日の放課後の、部活動中のことだった。僕の友達がからかわれて、とても嫌な思いをしていた。僕が気がついたときには、彼は我慢の限界を超えて、相手に飛びかかる寸前だった。その瞬間、僕は彼を押さえつけていた。後々考えてみると、そのとき僕を動かしたのは、喧嘩はいけないとか、やられる相手がかわいそうだとか、そういうことではなかった。そんな時間はなかった。目の前にいさかいがあって、そうしなければと思う間もなく、体が勝手に動いて止めに入った。

浦島太郎も、きっとそうだったのではないか。彼としては、息を吸うのと同じくらい、当たり前のことをしただけだったに違いない。

僕の友達は、落ち着いてから、「止めてくれなかったら殴ってしまっていた。」と感謝してくれた。先生も「よく止めてくれた。ありがとう。」とおっしゃった。僕はとてもうれしかったし、誇らしかったけれども、一方で、「そんなにほめられるほどのことをしたのかなあ。」とも思った、僕がそう言うと、母は何も言わずに微笑んだだけだった。今なら、それがなぜかわかる気がする。助けることも大切で、そして、助けたことを認め、応援するのも大切なことだったのだ。

母はこう教えてくれた。心の中にはコップがあって、悪いことをしたら、黒い汚い水が一滴、ポトリと落ちる。ポトリ、ポトリと汚い水が溜まり、コップがいっぱいになったら少しずつ溢れ出し、心は真っ黒に汚れていく。反対に、良いことをしたら、清い綺麗な水が一滴一滴溜まっていき、心は澄んでいく。

浦島太郎は、きっと心の中にそういうコップがあることを知っていた。僕が浦島太郎と同じ立場だったらどうだろう。亀は絶対に助けるし、玉手箱も開けちゃうだろうなあと思う。煙が出てきておじいさんになっても、後悔しない人でありたいなあとも思う。例えどうなろうと、コップの水を澄んだままにしておけるように、しなければならないことを自然にできる人間になりたい。誰かが良いことをするために勇気を出したら、それをすごいと認め、称賛し、味方できる人間になりたい。誰もが、今より一人でも多くの人が、そうして自分の心の中のコップを澄んだ水で満たしておけるようにすれば、世の中は綺麗になっていくと思う。

僕たちの生きる世界には、いじめがある。インターネット、ＳＮＳ、スマートフォン、できてまだ数年の技術がたくさんあって、いじめは、そんなところにも広がってきている。対抗するのに、難しいことは必要ない。

いつも自分の心の中のコップを見つめる。相手の心の中のコップを想像する。汚い水が広がらないように、清らかな水が広がっていくように、そういう気持ちを一人一人がもつことが、大切だと思う。

優秀賞

みんながもっている人権

横浜市立南希望が丘中学校　二年
箱崎佑音

僕には八十四才になる曾祖母がいます。青森県で暮らしているので普段は会えないのですが、毎年夏になると会いに行くのをとても楽しみにしていました。僕が小さい頃は、誰よりも早く起きて畑仕事を頑張り、みんなの健康を考えて朝御飯を作ってくれる、働き者のおばあちゃんでした。一緒にねぶた祭りに行ったり、花火をしたり色んな事をしました。いつも僕の事を気遣ってくれ「お互い頑張ろう」と励ましてくれる、誰よりも元気な曾祖母でした。

そんな曾祖母もいつしか体調不良を訴える事が多くなりました。数年前から目と耳に不調を訴え始め、今はもうあまり目が見えません。また、右耳もほとんど聞こえないそうです。目は、緑内障と白内障を併発していて、病院で注射などの治療を続けているのですが、良くならないそうです。そのせいで、曇りの日や雨の日は視界にもやがかかったようになってしまい、ほとんど見えないから嫌なんだ、と僕の母と祖母に言っているのを聞きました。

去年の夏、一緒に買い物に行った時のことです。曾祖母は言われた金額の支払いをするため財布からお金を出そうとしていました。でも目があまり見えないので、お札や小銭の種類を確かめるのに時間がかかります。

その時です。後ろに並んでいる人が「ばーさん、早くしろよ」と言いました。ドキっとしました。袋詰めをする台のところにいた僕はすぐ曾祖母のところに駆け寄り、お金を出してあげました。今まで曾祖母と一緒に買物に行ってもこんなに時間がかかったことも文句を言われたこともなかった僕は、何が起こったのか理解するのに時間がかかりました。でもだんだん冷静になってくると、怒りが込み上げてきました。たしかに、急いでいるときや待ち時間が長くなるとイライラするのも仕方ないとは思います。ですが、相手はお年寄りなのです。長いなぁと思いつつも、お年寄りだから仕方ないなぁとか、待っていてあげようとか思えないのかと思いました。

僕はこの事を母と祖母に話しました。祖母は言いました。

「いろんな人がいるからね。嫌な思いをさせちゃってごめんね。」

人間は誰でも年をとります。文句を言った人だって、今は思うように動けても確実に年をとるのです。その時どう思うのでしょうか。曾祖母のように体が不自由な人にだって人権はあります。これから先ずっと肩身の狭い思いをしないといけないのでしょうか。

人は、自分の考えを常識的だと思いがちです。でも人はそれぞれ事情があり、状況も違います。「人権を尊重する」とよく言うけれど、自分の考えを押しつけるのではなく、相手の立場に立ち、認め、相手の気持ちを考えて、思いやることこそが「人権を尊重する」ことになるのではないでしょうか。

お年寄りも体が不自由な人もそうでない人も、人権はみんなにあります。誰かが肩身の狭い思いをすることなくみんなが幸せに生きていくために、相手を認め、ほんの少しのやさしさをもつこと。このことが「人権を尊重する」ことにつながるとぼくは思います。

今年の夏、曾祖母は目の手術をします。そのためすぐに会うことはできません。でも、来年会う時は、手術が成功してもしなくても今まで以上におばあちゃんを助け、おばあちゃんを笑顔にしたい。そう強く思いました。

優秀賞

壁を破壊させてください

横浜市立山内中学校　三年
三隅（みすみ）　遥（はるか）

独特な美しいカーブを描くカーボンファイバー製のブレードが、白線ぎりぎりで地面を蹴り上げた瞬間、重力から解放されたかのように体がふわりと浮き、スピード感を失わないままぐんぐん前へ。宙を舞いながら空中でわずかに体を左にひねり、砂の上に体全体を預けるようにする思い切りのいい着地で白い砂が豪快に飛び散る。陸上の走り幅跳びのドイツ選手、マルクス・レーム選手の跳躍は、何度見ても魅了される。

レーム選手が、昨年のリオオリンピックの前年に、八メートル四十センチというオリンピック優勝記録を上回る記録を出したときは、大きな話題となった。パラリンピアンがオリンピックに出場して、トップアスリートたちと競い合う、というワクワクする光景を全世界が期待していた。だが、その後、世論が思わぬ方向に進んでいく。「反発力の高いカーボン繊維製の義足で踏み切ってジャンプするのは人間の脚より有利ではないか？」という意見が大きくなっていくのだ。こうした事態を受け、国際陸上競技連盟は、レーム選手のオリンピックの参加条件として、「義足には有利性がないと選手自身が証明すること」という条件を加えた。もともとレーム選手は、オリンピックへの出場を希望するのは、金メダルを狙いたいからではなく、「パラリンピック選手の競技力への理解や認知度を高めること」とし、自身の跳躍は参考記録でも構わないと明言していた。「義足

の有利性が無いこと」を証明するということは、実質的に不可能であることから「悪魔の証明」とも呼ばれ、レーム選手はそれでもオリンピック参加の可能性を探るべくその証明のために、努力をしたものの、オリンピックには間に合わないと判断し、リオオリンピックへの出場は、断念し、その後、パラリンピックで金メダルを獲得した。

このニュースに、私はとても違和感を持った。事故で片足を失い失意のどん底にあったレーム選手が、想像を絶する努力を重ねて、世界一のアスリートになった。誰にでもできることではない。その精神力は純粋に尊敬できる。レーム選手の周囲の人々も、彼を心から応援し、ジャンプの記録が伸びるたびに、喜んでいたに違いない。しかし、その記録が「健常者」を超えてしまったとたんに、風向きが変わった。「義足はずるい」という意見を、彼を応援してきたはずの世の中が認めてしまった。「技術ドーピング」とまで言われた。傷ついて苦悩して人の何倍も頑張って、世界レベルまで昇り詰めたら、急に足を引っ張られるという世界の構造は、私には受け入れがたい。「感動的な美談」として受け入れていたレーム選手の活躍を自ら汚そうとしている私たちの身勝手さに腹が立った。さらに、技術の進歩は、我々にとっても歓迎されるべきことであり、筋力などを薬を使ってひそかに、増強するドーピングと同列に考えるなんて、絶対に間違っているのではないか。

でも、私自身にも先入観があった。レーム選手が「健常者を超える記録を打ち立てた」とニュースで聞いたとき、とてもびっくりしてしまった。その驚きは単に記録が塗り替えられたことに対する驚きではなかった。障害者が健常者を超えるなんてすごい、と自然に感じていたのだ。身障者が健常者より優位にあることに対して無意識に引っかかっていた。その小さな引っかかりが集まって大きくなったときに、「義足はずるい」という意見になってしまうことに気づいたのだ。

レーム選手は義肢装具士でもある。「義足の素材はオリンピックの三年前から変えていない」という言葉から、彼がいかに身体能力を向上させ、跳躍の技術を磨いてきたかがわかる。義足のブレードは踏み切り時に高いエネルギーを発揮する代わりに、走るときにバランスを取りづらいので、助走のスピードは格段に落ちる。幅跳びは助走のスピードが、記録に大きく影響するという。そんな条件の中で素晴らしい記録を打ち立てるレーム選手が正当に評価されていないのでは、と思うと、もどかしさを感じる。障害者は健常者に競技記録が劣る、という私も抱いていた大いなる偏見を美しい跳躍で打ち破ったレーム選手が正しく評価されるような社会の仕組みをこれから私たちが作っていかなければならないと思っている。

これからも、義足をはじめとした装具の技術はどんどん進歩していくだろう。パラリンピックの選手がオリンピックレコードを超えることが、珍しくなくなる世の中になっていくかもしれない。レーム選手のような魅力あるアスリートが今まで見えなかった「壁」を軽々と越えていく未来。その姿に魅了された人々たちが知恵を集めて「壁」に穴をあけていく将来が見えた。

参加校紹介（139校）

■横浜市立

〔鶴見区〕
市場中学校
末吉中学校
鶴見中学校
寺尾中学校
矢向中学校
上の宮中学校
横浜サイエンスフロンティア高等学校附属中学校

〔神奈川区〕
浦島丘中学校
栗田谷中学校
六角橋中学校
神奈川中学校
松本中学校
錦台中学校
菅田中学校
盲特別支援学校

〔西区〕
老松中学校
岡野中学校
西中学校
軽井沢中学校
港中学校

〔中区〕
大鳥中学校
仲尾台中学校
本牧中学校

〔南区〕
横浜吉田中学校
共進中学校
蒔田中学校
南中学校
永田中学校
六ツ川中学校
藤の木中学校
港南中学校
上永谷中学校
笹下中学校
野庭中学校
港南台第一中学校
芹が谷中学校
日限山中学校
日野南中学校
丸山台中学校
東永谷中学校
南高等学校附属中学校

〔保土ケ谷区〕
岩崎中学校
保土ケ谷中学校
岩井原中学校
上菅田中学校
新井中学校
鶴ケ峯中学校
万騎が原中学校
希望が丘中学校

〔旭区〕
上白根中学校
左近山中学校
都岡中学校
旭中学校
南希望が丘中学校
今宿中学校
本宿中学校
若葉台中学校
旭北中学校
根岸中学校
浜岡中学校
汐見台中学校
洋光台第二中学校
森中学校

〔金沢区〕
金沢中学校
六浦中学校
大道中学校
西柴中学校
富岡中学校
富岡東中学校
並木中学校
釜利谷中学校
小田中学校
西金沢学園中学部
城郷中学校

〔港北区〕

新田中学校
日吉台中学校
大綱中学校
篠原中学校
樽町中学校
日吉台西中学校
新羽中学校
高田中学校

〔緑区〕

田奈中学校
中山中学校
十日市場中学校
鴨居中学校
東鴨居中学校
霧が丘学園中学部

〔青葉区〕

山内中学校
谷本中学校
青葉台中学校
みたけ台中学校
美しが丘中学校
すすき野中学校
奈良中学校
緑が丘中学校
もえぎ野中学校
あざみ野中学校
鴨志田中学校
市ケ尾中学校

〔都筑区〕

あかね台中学校
都田中学校
中川中学校
川和中学校
茅ケ崎中学校
荏田南中学校
中川西中学校
東山田中学校
早渕中学校

〔戸塚区〕

大正中学校
戸塚中学校
舞岡中学校
境木中学校
豊田中学校
汲沢中学校
名瀬中学校
深谷中学校
南戸塚中学校

〔栄区〕

本郷中学校
上郷中学校
桂台中学校
西本郷中学校
飯島中学校
小山台中学校
岡津中学校

〔泉区〕

中和田中学校
泉が丘中学校
中田中学校
上飯田中学校
いずみ野中学校
領家中学校

〔瀬谷区〕

瀬谷中学校
原中学校
南瀬谷中学校
東野中学校
下瀬谷中学校

■その他

横浜共立学園
横浜中華学院

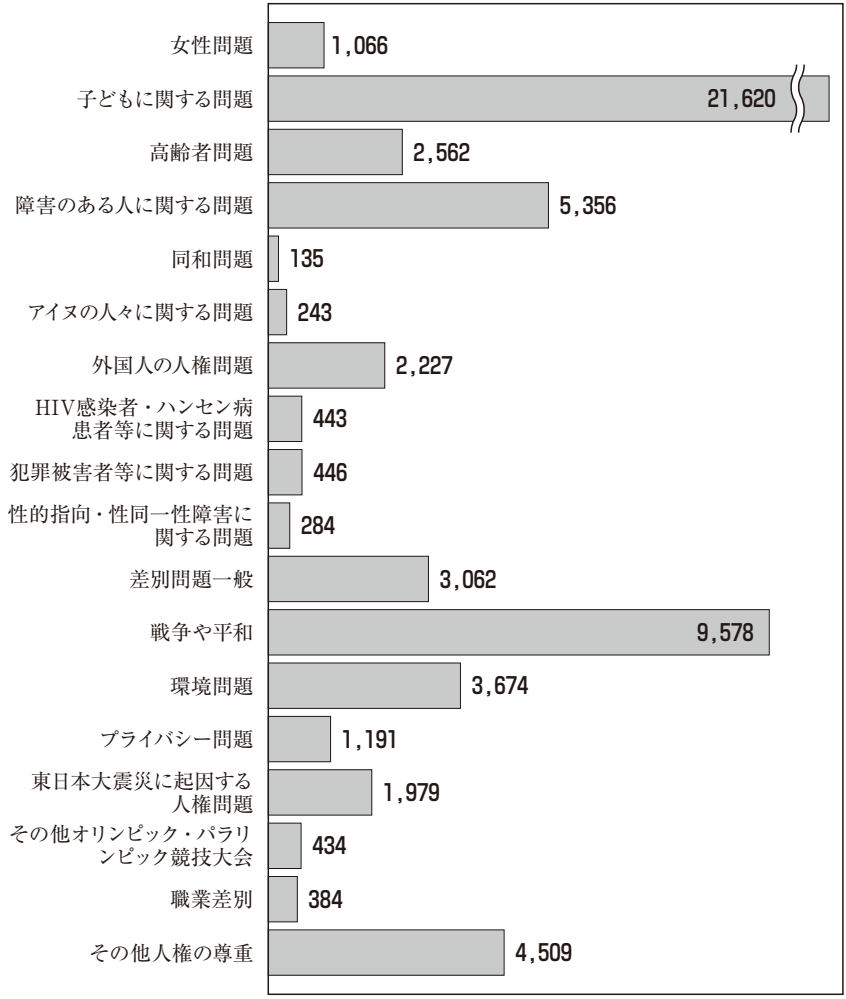
ご協力ありがとうございました。

●応募状況

【1】推　移

年　度	23年度	24年度	25年度	26年度	27年度	28年度	29年度
応募校数	142	143	141	143	144	140	139
作 品 数	51,492	55,824	58,016	58,487	60,721	60,209	59,193

【2】テーマ別内訳



●平成29年度全国中学生人権作文コンテスト横浜市大会

〈第一次審査員〉

横浜市立中学校教育研究会国語科部会　30名

〈第二次審査員〉

横浜市教育委員会事務局指導主事　11名

〈最終審査員〉

横浜人権擁護委員協議会会長	坂田清一
横浜市人権擁護委員会第一ブロック委員	新田弘子
横浜市人権擁護委員会第二ブロック委員	新関惠子
横浜市人権擁護委員会第三ブロック委員	籾山恆春
児童文学作家	吉富多美
横浜市PTA連絡協議会会長	海上良太
横浜市立中学校人権教育推進協議会会長	井上菜穂子
教育委員会事務局　健康教育・人権教育担当部長	伊東裕子
市民局人権担当理事	徳江雅彦

●協賛

横浜DeNAベイスターズ
横浜F・マリノス
横浜FC
横浜ビー・コルセアーズ

横浜市人権啓発活動ネットワーク協議会

横浜市内における人権啓発活動を、関係機関の協力のもとに総合的かつ効果的に推進するために平成12年9月に設立。

構成：横浜市・横浜人権擁護委員協議会・横浜市人権擁護委員会・横浜地方法務局

平成29年度
全国中学生人権作文コンテスト
横浜市大会作文集

平成29年11月

横浜市市民局人権課　TEL 045(671)2718
横浜市教育委員会事務局
人権教育・児童生徒課　TEL 045(671)3724